富山大学人間発達科学部附属人間発達科学研究実践総合センター

Center News

Center for Educational Research and Practice
Faculty of Human Development, University of Toyama

第36号
（2017年3月21日発行）

寺西康雄客員教授によるけん玉セラピー実習

センターニュース第36号　目次

02　巻 頭 言……学 部 長　鳥海　清司
03　挨　　拶……センター長　千田　恭子
客員教授　寺西　康雄
05　報　　告……客員教授　寺西　康雄
客員教授　安井　俊夫
06　学園通信　附属幼稚園 ／ 附属小学校 ／ 附属中学校 ／ 附属特別支援学校
08　活動報告　・学習環境研究部門
・教育臨床研究部門
・教育工学研究部門
・環 境 教 育 部 門
10　報　　告　内地留学を経験して
11　報　　告　・平成28年度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会
・第90回国立大学実践研究関連センター協議会報告
12　業務報告　センター日誌
編集後記

巻頭言

「新」センター

人間発達科学部　学部長　**鳥海　清司**

平成28年４月から富山大学に大学院教職実践開発研究科いわゆる教職大学院が設置されました。この研究科はその名の通り「教職」に関する大学院ですので、設置にあたっては富山大学における教員養成の中心学部である人間発達科学部が中心となりました。中心となったという意味は、実際に教職大学院に教員が移動して設立に貢献していただいたということも含みます。その中には人間発達科学研究実践総合センターの教員も含まれています。このように、教職大学院の設置によって人間発達科学研究実践総合センターは新しくなることが余儀なくされました。

新しいセンターと言っても、人間発達科学部附属のセンターであることには変わりありませんし、建物などの外見が変わったわけでもありません。センターニュース34号の巻頭言で「実践センターの専任教員は教職大学院の専任教員及び学部のコースの専任教員に配置換えとなり、実践センターでは兼任教員としての業務に携わってもらう予定である。」と申し上げていましたように、教員の所属の仕方が変わりました。これまでもセンターの専任教員は学部の学科の教員としても所属をしていましたので、形式的な所属部署が変わったということになります。また、教職大学院へ所属された教員についても、センターのスタッフとして加わっていただけるようになっています。センターニュース34号の巻頭言で書かせていただいた「教職大学院は教師教育における実践的な力を育むことを目的としており、実践センターの機能と役割が重複する部分が多い。」という内容からは当然のことではありますが、まさに、「教職大学院と人間発達科学部及び人間発達科学研究科との橋渡しをする役割を担ってもらいたい。」を果たしていただいております。

実践センターには附属学校園との共同研究についてのコーディネートも担ってもらっております。日本の教育が改革の真っただ中にある現在、大学・学部の附属学校にその存在意義が再確認されております。すなわち、一般の公立学校との違いが何であり、何が特徴なのかが問われております。大学・学部の一組織であるため、当然、大学・学部を意識した特徴が必要になります。具体には、教員養成における実習校としての役割、大学・学部と連携した研究活動による地域教育牽引の役割、教職大学院との連携・協力の役割などが挙げられます。これらは、附属学校園の教育資源を大学の教育にどう生かすのか、あるいは大学が持つ研究資源を附属学校園へどう生かすのかという視点ですが、今後は、大学・学部が持つ教育資源を附属学校園に取り入れて、一般公立学校とは異なった特徴的な教育を実践していくことがより多く求められるでしょう。新しいセンターでは附属学校園との共同研究を通して大学・学部・附属学校園の教育資源をいかに活用していくのかについても検討を始めてもらっています。センターニュース33号巻頭言で「センターには、現在もっている機能を活かして、教職大学院、人間発達科学部及び研究科、教育の実践現場をつなぐハブとしての役割を担ってくれることを期待しております。」を実践してもらっています。

以上、実践センターは基本的機能に大きな変化はありませんが、新しい組織を取り入れ、新しい視点から機能をより充実させていって「新」センターとなっていってもらえることに期待いたします。

挨　拶

人をつなぐ場として…

人間発達科学研究実践総合センター長　千田　恭子

2001年４月に富山大学に赴任してからアッという間に15年が過ぎ、16年目の今年度４月より、前山西センター長の後を受けてセンター長に就任いたしましたが、これまで、研究実践総合センターのことを、よく理解していなかったということが、この10ヵ月あまりでよくわかりました。先生方に助けて頂き、何とかつとめを果たしている状態です。

音楽、特に声楽を中心に研究を続けてきた私にとって、人と人との繋がりは非常に大切なものです。一つのステージ、一つの舞台を創り上げる為には多くの歌い手、演奏家、スタッフの力が必要であり、協調性、対応能力を身に付け、多面的な角度で物事を捉える能力が必要になります。そうして、一つの舞台が幕を下ろしたとき、何とも言えない充実感に満たされました。

この人と人との繋がりは、どのような場面においても重要な役割を担います。

センターは教育現場と大学を繋ぎ、授業づくり、心の問題、ＩＣＴ活用に対応するために学習環境研究部門、教育工学研究部門、教育臨床研究部門において、先生方は大学教員としての仕事の他に、積極的に様々な活動をなさっています。さらに、あらたに環境教育部門が誕生し、地域との交流の窓口となるだけではなく、地域の方々と一緒に行う活動が始まりました。

一方で、大学と附属学校園が協力して行っている共同研究プロジェクトでは、研究成果を広く地域に発信し、他校の教育にも役立てるための方法を検討するとともに、大学教員が研究を活かした探究的な授業を附属学校園で行うことについても話し合いを始めるべく、センターに設置されている共同研究プロジェクトＷＧの中に新しくグループが設置され、次年度に向けて動き出そうとしています。

内地留学の方も大勢こられており、期間中の様々な経験を生かし、指導教員とともに各人の研究テーマを追求なさっています。

教員を目指す学生の指導には実践経験の豊富な客員教授の先生方にもご尽力頂き、教員採用試験対策及び学生の資質向上を支援しています。

また、今年度より教職大学院が開学されたことを受け、今後は教育問題に関する実践的な研究の場としてセンターとの連携を深めることが求められていくことでしょう。

センターの役割は非常に多岐にわたっていますが、どれも人との繋がりがなくては成立しません。その繋がりが新しい繋がりを生み、幅広い教養と豊かな人間性を生み出す基礎となっていくのだと思います。

今後も活動を続けられる先生方に心からのエールを送り、私はそれを縁の下で支えられる様な人間でありたいと思う今日この頃です。

挨　拶

成長したKさんのこと ～お礼の言葉に代えて～

センター客員教授　寺西　康雄

大学の片隅にある実践センター、そのまた片隅にある「心と教育の相談室」で、私は2007年度より子ども・保護者・教師を対象とした相談業務と内地留学生を対象とした教育相談演習を担当してきました。実践センター勤務の10年間を振り返ると、なんと多くの「出会い」と「別れ」があったことか。そんな中にあって、2009年度から現在に至るまで、８年間、共に歩み続けてきた青年がいます。Ｋさんです。

Ｋさんは、外出先など特定の場面で全く話すことができなくなってしまう場面緘黙症と向き合いながら23歳となりました。今も話すことはできませんが、それでも大きな成長を遂げてきました。Ｋさんに寄り添ってきた私も、試行錯誤の取り組みの過程において少しは成長できたかなと思っています。

この３月末で退任するに当たり、Ｋさんの成長した姿の一端をご紹介し、これまでＫさんのためにいろんな形でご支援ご協力くださった皆様方へのお礼の言葉に代えさせていただきたいと思います。

Ｋさんは、当初、会話ができない緘黙と合わせて体が思うように動かせない緘動という状態でした。しかし、内地留学生をはじめ多くの方々の温かく献身的な支援を受けながら、次第に表情が柔らかくなりました。会釈ができるようになりました。身振り手振りで意思表示できるようになりました。筆談による意思疎通もできるようになりました。けん玉道四段となり、指導員資格も取得しました。

昨年11月、ある小学校でけん玉セラピー実習を行い、内地留学生と一緒にＫさんも同行しました。私はＫさんとペアを組み、子どもたちの練習ぶりを見て回ります。Ｋさんは私のアドバイスを参考にしながら「構えるときに利き足を前に」「玉の穴が自分の方を向くようにひじを引く」など、気づいたことを手帳に書き留めていきます。子どもたちを集め、Ｋさんのメモをもとに私が子どもたちにコツを説明します。それを受けてＫさんがお手本を実演します。「さあ、やってみよう！」という私の掛け声で子どもたちが練習を再開します。Ｋさんのメモと模範演技を思い出しながら何度も苦手な技に挑戦し、見事成功すると子どもたちはＫさんに駆け寄ってハイタッチをして喜びます。

無事に指導員デビューを果たしたＫさんの姿が新聞とテレビで報道されました。記者のインタビューに対し、「今後の目標は、自分の体験をもとに、けん玉を通して自信がつくことを子どもたちに伝えることです。また、相手の気持ちが分かり、心から感謝できる人間になって、どんな人でも生きやすい世の中にすることです」とメールしました。

その後、Ｋさんのもとには、「緘黙を抱えながら前向きに生きている姿が、多くの人々を勇気づけているのだなと思いました」など、多数の励ましのメールが寄せられました。

Ｋさんは、毎日、午前２時半に起きて新聞配達をし、週１回、ケアラーズカフェでの就労体験にチャレンジしています。そして、「しゃべらないでけん玉を指導する方法」の研究を続け、「けん玉道五段合格」の夢を実現すべく、日々、精進を重ねています。

私は、退任後も、「日本けん玉協会富山支部・とやま親子けん玉クラブ」の同志として、「場面緘黙を考える会 富山」の仲間として、Ｋさんにかかわり続け、共に成長していきたいと念じています。

富山大学の先生方や事務職員の皆様、大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

報　告

学　び　合　い

センター客員教授　寺西　康雄

私は、これまで、学校現場や教育機関での相談活動に携わりながら、「学びの二極化」がいじめや不登校等の背景になっているとの思いを強く抱いてきました。「すべての子どもが安心して学べる授業」「１人残らず学びが成立する授業」を長年追い求めてきました。そして、「学び合い」（協同的な学び）を大切にした授業によって格差を解消することができると気づきました。それ以来、私は校長として、授業研究を学校経営の中核に据え、教師から子どもに一方的に教える「一斉指導方式」の授業から、子どもたちが互いに考えを出し合い、聴き合って学ぶ「学び合い」の授業への転換を図ってきました。

内地留学生対象の演習の中でも、互いに考えを出し合い、聴き合って学ぶ「学び合い」の授業を実施してきました。必要に応じ、ペアやグループを取り入れることによって、内地留学生同士が意欲的、積極的に意見を交流することができるようになりました。当初、内地留学生は慣れない授業スタイルに戸惑っていました。しかし、回を重ねるにつれて話が弾み、深化していきました。内地留学生同士で聴き合うかかわりが生まれることによって、温かく、柔らかい雰囲気に包まれ、安心して学べる風土が築かれていきました。

３か月間の研修期間を終えた内地留学生の方々から私のもとに、次のようなメールが届きました。

「コの字型になって、お互いに顔を見ながらいろんな方とペアやグループになってトークしたり、みんなの前で発表したりする機会を経るうちに、日ごろの内地留学生同士の会話も活発になっていきました」
「私は水曜日が楽しみでした。内地留学生同士が聴き合い、学び合うことがとても嬉しかったからです」

内地留学生には「学び合い」の授業を通して、いじめや不登校等を未然に防止してほしいと願っています。

確かな教育実践に向け、実践と研究を交流し学び合う

センター客員教授　安井　俊夫

学校現場の実践と大学の研究の橋渡し、融合、そして教師と研究者による協働の関係づくり、今年度もこのことに重点を置き取り組んできました。交流と学び合いの場づくりを推進するとともに、その環境整備や活動内容の一層の充実に努めてきました。具体的には３つの取り組みを進めてきました。

まず、これまで月一回夜間に行っていた学校の先生方と大学のスタッフによる、学校経営・学校運営に関する勉強会を、研究会(「明日の学校をつくる研究会」)というかたちにし、より確かなものとして活動できるようにしました。「学校のリーダーに求められるものは何か」「学校の共有ビジョンをどのように形成し、具現化していくか」等をテーマに取り上げ、学校現場の現状を十分に踏まえまがら、文献等も参考にし話し合いを進めています。

また、８月には、少しでも多く学校の先生方に大学に来ていただき共に学び合う、「教育フォーラム2016 (教職の意味づけに向けて)」を開催しました。教職大学院教授の竹村　哲　先生から「教師が専門家として学びあい高め合う学校へのパラダイム転換」という演題で話をしていただき、その後グループワーク(ラベルワーク)を行いました。話を聴いての疑問や意見等をラベルに書き、それをもとに話し合いを進めました。初めての試みでしたが、県内の小・中学校、特別支援学校等から先生方に参加していただき、大学のスタッフや大学院生も加わり、教師が専門家として成長する学校づくりについて理解を深めるとともに、互いに交流し学び合うよい機会となりました。

そして、内地留学生のみなさんとの学習会。今年度はとくに学習指導要領の改訂も間近ということもあり、テーマに「これからの時代と学力」「アクティブ・ラーニングと授業改善」「校内研修・授業研究」等を取り上げ、これからの学校教育の方向と課題について理解を深めました。

学園通信

附属幼稚園から

附属幼稚園　米﨑　瑛美

「子どもの体験を支える」を研究主題に設定し、３年目を迎えました。昨年度は「環境の構成」に視点を置いて、子どもの体験をどのように支えていけばよいのかを考えてきました。子どもの体験のつながりを過去から未来への縦のつながりにだけ着目するのではなく、人と人との間の横のつながりも意識して、子どもがどんな体験を重ね、その体験をどのようにつなげていくのか、しっかり見通しと組み立てのプランをもって環境の構成をしていく重要性を実感するとともに、保育者として保育の質の向上を意識していくことの大切さを痛感しました。

そこで今年度は、「体験を生かす援助のあり方を探る」という視点から、保育者の役割に視点を置き、子どもが体験と体験をつなぎ、さらにその体験を生かしていけるように支えながら、心豊かな子どもの育ちを目指してきました。保育者がどんな意図をもって、子どもの体験の何をつなごうとしたのか、何がつながったのかを明確にすることで援助のあり方を浮き彫りにし、保育者の役割を明確にしていこうと試みました。

大学の先生方には、年間を通して、専門的なご意見やご助言をいただき、研究を進めてきました。また、６月16日（木）には、お茶の水女子大学人間発達教育科学研究所教授の宮里暁美先生を講師にお迎えして、保育フォーラムを開催し、県内外から多くの方の参会を得、共に学ぶ機会をもつことができました。

各学年の研究から発達段階に応じた保育者の役割が明らかになるとともに、子どもの遊びや願いに沿うように、それまでの体験や次の体験を常に意識した、遊びや活動の流れを見通した援助は、一人一人の体験を子ども自身が生かすことになり、かつ心の成長に有効に響くことが分かりました。今後も、子ども主体の保育を大切にした援助のあり方について模索していきたいと考えています。

附属小学校から

附属小学校　阿久津　理

附属小学校では、自ら問いを立ててその解決を目指し、多様な他者と協働しながら新たな価値を生み出していくために必要な資質・能力を育成することを目指して、「思考の活性化による認識の深まり」を研究主題に設定し、４年目（最終年度）を迎えました。

昨年度は、認識の深まりを実感する場面に焦点を当てて研究を進めました。そこでは、子供たちが知識を活用したり、表現方法や表現のよさを獲得したりする様相が見られました。また、学習の成果、学習態度に対する達成感や満足感を感じたり、獲得した知識・技能に対して有用性を感じたりする様相も見られました。ここでは、振り返りの観点を決めてノートに書いたり、学級でつくり上げた考えを学級全体で伝え合ったりする場の設定が有効な手立てとなりました。また、言語活動と表現の往還を図る場や学習の成果を確認したり、獲得した知識を自分の生活に生かしたりするなど、学んだことを活用する場の設定等の手立てにより、子供が認識の深まりを実感していくことが明らかになりました。本年度は、このような３年間の研究の成果を基にし、「思考の活性化を経て、深まった認識を形成する」という副題を立て研究を進めています。

28年10月からの研究実践では、思考の活性化を経て、深まった認識を形成するための有効な手立てが明らかになってきました。この成果は、書籍にまとめて出版するとともに、29年６月16日に、平成29年度教育研究発表会で報告したいと考えています。そこでは、文部科学省視学官澤井陽介先生をお招きし講演を予定しており、今後の研究にご示唆をいただき、新年度の研究に生かしたいと考えています。今後も附属小学校の研究にご指導とご協力をお願いいたします。

附属中学校から

附属中学校　萩中奈穂美

本校では、研究主題「主体性の高まりを目指す課題学習」の下、副題「教科の本質に迫る授業づくり」を掲げて研究を進めています。「教科の本質とは」―これが今年度、授業に向かう私たち自身への問いかけでした。そこで取り組んだのは、当該研究授業が「何のために」「何」を目指すのかを明確にし、その共通理解を図ることです。そのために、事前研修会において他教科の教員も含めて質疑応答を行いました。他教科の教員からも納得を得られる授業にするには、授業のねらいが当該教科の本質に立脚し、生徒の姿で説明できるレベルまで明確になっている必要があります。他の教員からの率直な質問によって曖昧な部分が露呈するため、授業構想等に関して再考に繋がることもあり、事前協議会は授業者にとって有意義なものとなりました。一方これは、他の教員が当該授業の趣旨を十分踏まえ、具体的な課題意識をもって授業を参観することにも繋がりました。また、各教員が「研究テーマ」「教師」「生徒」のうち一つの観点を担当し、独自の分析シートを用いながら観察・分析を行うことで、事後協議会の焦点化を図りました。さらに、各観点別に分かれた班の協議で問題になった点を全体で議論することで、多角的な授業の検証も実現しました。

このような取り組みを通して、「教科の本質」を踏まえた「付けたい力の明確化」が授業作りの根幹であることを再認識しました。29年度は新学習指導要領の理念や方針も踏まえて、生徒たちに必要な資質・能力を付けていくための「教科の本質に迫り授業づくり」を追究していくつもりです。６月の教育研究協議会やその後に行う公開授業では参会される先生方からの忌憚のないご意見を拝受したいと存じます。よろしくお願いいたします。

附属特別支援学校から

附属特別支援学校　柳川公三子

附属特別支援学校では、「教師一人一人が専門家として自ら学び続け、同僚性をもって互いに育ちあうこと」を目的とし「学びあいの場」を設定した。これは、文科省の「次世代の学校・地域」創生プランの策定（2016.1.25）における「学びあい高め合う教員育成コミュニティの構築」を踏まえたものであり、パイロットスクールとしての取組である。

従来の“教えあう”授業研究の在り方を見直し、同僚教師が互いの見方や捉え方を“聴きあう”「自分らしい授業づくりを支える学びあい」へと転換を図っている。授業者と同僚観察者が”聴きあう”ことによる学びは、”教えあう”ことによる学びに比べ、問題解決に時間がかかる場合があるが、同僚同士が「対話」を通し、自分自身で気づくといった本質的な学びを目指すものである。

年間11回の「学びあいの場」を設け、公開授業、ワークショップを実践しながら段階的に理解推進を図ってきた。新たな授業研究へとパラダイムを転換することは容易ではないが、毎回、「学びあいの場」実施後に振り返りを行い、改善を重ねることで、徐々に「学びあいの場」の意義を感じる教員が増えてきている。

「学びあいの場」における気づきから、いかに授業者が自分で改善策を見出し、自身の実践に生かせるようになるかといった課題が挙げられるが、普段から同僚同士が気軽に悩みを共有し、学びあい高め合う教員育成コミュニティの確立を目指したい。

活動報告

学習環境研究部門

センター准教授　長谷川春生

学習環境研究部門では、年度当初の計画に基づき、次の3つの活動を実施した。

【研究会の開催】

11月12日（土）、講師に青山学院大学の伊藤一成氏と竹中章勝氏をお招きして「小中学校におけるプログラミング教育はどうあればよいか」を開催した。小中学校等の先生方など,50名を超える方々からご参加をいただいた。

第１部、伊藤一成氏による講演「産官学『プログラミング教育』大合唱の今、心に留めておくべき大切なこと」では、プログラミング教育について文部科学省、総務省等で現在様々な検討が進められていることを具体的に知ることができた。また、コンピュータサイエンスの立場から考えるプログラミングの意味や、青山学院大学の文系学生に対するプログラミング教育の様子を教えていただいた。今後、プログラミング環境や社会の変化も視野に入れつつ、プログラミング教育の在り方を考えていく必要があることを理解できた。

第２部、竹中章勝氏によるワークショップでは、小学生でも活用可能なプログラミング言語であるScratch Jrによるプログラミングについて、実際に子どもたちに指導するときと同じような方法で教えていただいた。プログラミングの方法だけでなく、具体的な授業の進め方も理解することができた。

【ＩＣＴを活用した授業実践】

当部門の研究協力員である南砺市立福光東部小学校の齋藤雅弘教諭とともにタブレットＰＣを活用した授業実践を行った。２学年の図画工作科ではグループに１台のタブレットＰＣを活用した授業，５学年の算数科では１人に１台のタブレットＰＣを活用した授業を行った。授業実践の結果については来年度に学会等で発表の予定である。

【プログラミング教育についての実践】

人間発達科学部附属小学校のコンピュータクラブの活動で、児童にもプログラミングが可能とされているScratch等によるプログラミングの学習を実施した。児童の活動への意欲は高く、来年度以降も継続して進めていきたい。

教育臨床研究部門

センター准教授　石津憲一郎
センター講師　近藤　龍彰

教育臨床部門では、新任教員が着任し、准教授１名、講師１名となった。今年度は例年よりも多くの内地留学生を受け入れ、年間13名の内地留学の先生方が研修を行った。研修のテーマは生徒指導や教育相談に関するものであり、これまでの経験を振り返り、経験と理論とを統合するための研修が行われた。本内地留学の制度は教員カウンセラー（富山県カウンセリング指導員）養成事業として行われているため、その歴史や制度、仕事内容に関する研修報告も散見された。こうした研修の機会を生かし、現場においてその成果を子どもたちやその保護者のために還元してもらえたらと考えている。また、今年度の教育臨床部門における研修会としては、富山大学人文学部と共同で、東京学芸大学の小林正幸先生をお迎えし、富山県教育委員会の後援を受けながら不登校に関する研修会を行った。教育臨床部門では、現職教員の研修や各専任教員の研究だけではなく、様々な研修会や臨床実践のための講演会を開催してきた。このように地域との連携の中で、実践センターが担っている役割を引き続き果たしていきたいと考えている。

教育工学研究部門

センター教授　小川　　亮

どうするＩＣＴの教育利用とプログラミング

平成28年12月７日（土）に富山大学人間発達科学部211教室を会場に、ＩＣＴの教育利用とプログラミング教育に関心を持つ学校教育関係者、大学院生、学生を対象にした、表記の講演会を開催しました。学内の教員、院生、学生に加えて、県内の小学校、中学校、高等学校、教育委員会関係の教員など,80名を超える参加者を得ることができました。

講演会は２本立てで行われ、まず日本教育工学会会長でもある、山西潤一名誉教授から「先進諸外国からみた日本の情報化 ―プログラミング教育のねらいと課題― 」という演題で講演をいただきました。世界のいろいろな国での調査研究を背景に、日本における教育の情報化の現状について解説されました。また小学校におけるプログラミング教育の必修化の問題について、山西先生自身が取り組まれてこられたLOGOやScratchによる教育実践を踏まえて、子どもがプログラミングを学ぶ意味について説明されました。

休憩を挟んで後半は、高橋純東京学芸大学准教授に「次期学習指導要領を踏まえたＩＣＴの教育利用」について講演をいただきました。研究成果をベースに、どのような学習環境と指導が、効果的な学習を生むのかについて、解説をいただきました。２つの講演の後、会場の参加者と質疑応答をしながらＩＣＴの教育利用と教育改革の現状について理解を深めることが出来ました。

環境教育部門

センター准教授　高橋　満彦

環境教育部門（農場）では、今年後期も倦まず弛まず実務に従事いたしました。学生の栽培技術実習は基本的には前期で終了しましたが、高橋担当の授業「環境と人権」で冬野菜の収穫と餅つきの実習を行い、実習経験者を中心に学生たちはきびきびと冬の農作業を楽しんでいました。餅つきは幼稚園や小学校教諭には有意義な技術でもあり、ここ数年発達教育学科の複数の教員から学生の実習を依頼されます。その際には、経験豊かな農場技術職員と、技術協力員が、実習で栽培したもち米を蒸籠で蒸すところから伝授いたします。

なお、学生が実習で植えた米は夏季休暇中に教職員と技術協力員で収穫し、附属学校園や学部の調理実習等の教育用に活用し、残りを学内で販売しました。また本年は富山経済同友会の六次産業委員会との共同事業で醸造試験用の黒米、赤米を、公開講座でもち米を栽培したため、うるち米の収量は例年より少なくなりました。富山経済同友会からは農場へ寄付金も賜り、感謝しております。

４月から始まった公開講座も10月に最終講義を終え、こちらも餅つきで収穫を祝いました。今年は、親子で栽培を楽しむという初めての企画でした。幼稚園就園前の子どもの対応等に苦労する部分もありましたが、お互い楽しく終えることができました、しかし、子どもを支援するために学生アルバイトの雇用を計画していましたが、担当の地域連携推進機構では認めてもらえませんでした。本学部の学生にとっても勉強になると思いましたので残念ですし、こちらの負担も重いので、来年の公開講座は規模を縮小する見込みです。

報　告

内地留学を経験して

飯田　澄代

今までは、その日にやるべきことに追われ、走ってきたように思います。ここでの生活は、自分を見つめ直し、振り返るよい機会となりました。大学生として学ぶことは新鮮で喜びも大きかったです。日々、大学の先生方の素晴らしさを感じるとともに内地留学の先生方の誠実さ、子供たちを思う熱意に触れ、ふがいなさを感じました。しかし、理解力も記憶力も低下している自分にとって大学生活はよい刺激になりました。もっと若いときに多くのことを学んでおくべきだったと悔やんでいます。

これまで、多くの子供たちと関わってきましたが、もっと子供たちの心の声を聴いてあげればよかったと思っています。学ぶことの大切さを知り、それを実践していくことの意味を強く感じています。今後も、自分の時間をみつけ学んでいきたいです。そして、子ども一人一人を大切にしていきたいと思います。

原田　智美

この内地留学の３ヶ月間の研修で、現場にいる時にはできない様々な経験をすることができました。また、余裕をもって広い視野で物事を考えることができました。さらに、普段の生活では出会うことができない方々と出会い貴重なお話を聞くことができました。授業をする側から受ける側になり、生徒の立場で過ごすことはとても新鮮な毎日でした。全く分からないことが辛かったり、上手くできないことが苦しかったり、発表する前に心臓が飛び出すほど緊張したり、理解できたときに喜びを感じたり、自分の体験と理論がつながった時にうれしい気持ちになったり、と。

まだまだ教師として至らないところだらけです。引き続き学ぶ姿勢を大切にし、子どもたちのために研鑽を積んでいきたいと思います。

美谷　篤志

内地留学では多くの収穫がありました。特に教育観を再構築できたことは大きかったです。教育の目的、自分が子どもたちにもたらすことができるものとは、といった根本的な教育に対する考えを突き詰めて考えました。そして、報告書のテーマでもある「自己有用感」を育てることに辿り着きました。講義や演習は、実践経験があるからこそ理解できること、改めて理論を学び納得できることがあり、とても有意義な学びとなりました。カウンセリングに関する勉強も意義深いものでした。「カウンセリングの唯一の武器は双方向のコミュニケーション」という石津先生の言葉が印象的です。内地留学で学んだ理論や手法を実践の中で活用していき、行き詰まったらまた学び直して実践し、少しでも子どもたちの成長に寄与できればと思います。一緒に学んだ内地留学生の先生方との情報交換や研修、会話や食事、けん玉の練習は楽しかったです。外部関係機関への訪問も、生徒指導の幅を広げる上で貴重な研修となりました。

坂東　佑治

この３ヶ月間、現場を離れ客観的に自分を見つめ直すことができました。内留中には講義を受けたり、なかなか読めなかった本にもじっくり目を通したりして自分の課題と向き合うことができました。施設訪問では、多くの施設を見学させていただいたりお話を聞かせていただいたりして、辛い思いをしている子どもたちがたくさんいるということを知りました。また、たくさんの方々と出会い、共に学ぶことや人とのつながりの大切さなど多くのことを感じながら、日々を過ごしました。

私は、この３ヶ月間で多くのことを学ばせていただきました。その中でも特に大きかったのは、「学び続ける」ということです。日野原重明先生は「命とは時間である」ということをおっしゃっていました。子どもたちのために学び続け、大切なことのために時間を使っていきたいと思います。この３ヶ月間での学びを生かし、子どもたちが幸せに生きることのできる環境をつくっていきたいと思います。ありがとうございました。

報　告

平成28年度教大協北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会

平成28年10月21日（金曜日）に、上越教育大学の学校教育実践研究センターを会場に、表記の協議会が開催されました。富山大学からは、小川と近藤が参加し、各大学の教育実践センターを取り巻く現状と解決策について、協議を行いました。特に教職大学院との関係や、専任教員が学部との兼担になっていく問題、発達障害を持った学生への心理相談・支援のあり方などを中心に協議を行い、大変有意義な情報交換を行うことができました。来年度は福井大学が会場となることが確認されました。

第90回国立大学実践研究関連センター協議会報告

平成29年２月14日（火曜日）に、東京学芸大学南講義棟を会場に、表記の協議会が開催されました。富山大学からは近藤が参加しました。総会では、国立大学教育実践研究関連センター協議会会長の浦野弘教授より開会の辞があり、その後2016年度各部門報告、部門プロジェクト報告、2015年度会計収支報告、2016年度会計中間報告、2017年度予算の報告が行われました。また、規約改正についても議論されました。さらに2017年度の新役員についても承認の決議が行われました。なお、平成28年９月20日に大阪教育大学で開催予定であった第89回国立大学実践研究関連センター協議会は、台風の影響により中止となったものの、役員会は行われたため、会としては成立したことも承認されました。

午後には、大阪教育大学、上越教育大学、琉球大学の各実践センターの現状と課題の報告があり、それを受けて「実践センターのあり方」についての全体的な議論が行われました。その後、部門別の会議が行われました。近藤は教育臨床部門に参加し、各実践センターの臨床部門の現状と課題について、情報交換および協議を行いました。特に、実践センターが改組されるにあたり、臨床部門がなくなっていく現状があり、臨床部門の存在意義を過去・現在・未来とつなげていく重要性が確認されました。

業 務 報 告

センター日誌　平成28年度の実践総合センターの主な行事

平成28年（2016）５月24日　センター会議
６月29日　センター運営会議・センター紀要編集委員会
７月13日　センター会議
８月３日　教育臨床部門研修会
「不登校児童生徒に関する研修会」
８月27日　学校と大学とのコラボレーション
教育フォーラム2016（教職の意味づけに向けて）
９月１日　センター紀要編集委員会
10月５日　センター紀要編集委員会
10月21日　日本教育大学協会北陸地区教育実践研究指導部門研究協議会（上越教育大）
10月31日　センター会議
11月10日　センター会議
11月12日　学習環境研究部門研究会
「小中学校におけるプログラミング教育はどうあればよいか」
12月７日　教育工学研究部門講演会
「どうするＩＣＴの教育利用とプログラミング」
12月15日　センター会議

平成29年（2017）１月29日　ふれあい体験餅つき実習
２月１日　センター会議
２月14日　第90回国立大学教育実践研究関連センター協議会（東京学芸大）
２月23日　富山経済同友会六次産業化委員会との醸造試験

編集後記

編集担当が着任したばかりということもあり、右も左もわからないままの編集作業でありましたが、皆様のおかげをもちまして、センターニュースの36号をお届けできることとなりました。

教育をめぐる社会情勢が大きく動く近年において、実践センターのあり方も大きく変わろうとしています。そのような中で、実践センターの存在意義とは何か、そしてひいては教育とは何かという本質的な問い直しの議論が必要になってくるものと思われ、これからの課題と考えております。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。　（近藤　龍彰）

印　　刷　平成29年３月21日
発　　行　平成29年３月21日
編集発行　富山大学人間発達科学部
附属人間発達科学研究実践総合センター
代表者　千田　恭子
〒930-8555 富山市五福3190　☎076-445-6380